コロナ禍におけるリモート教育に関する覚書

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-03-20 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 田原, 広史 メールアドレス: 所属:
URL	https://osaka-shoin.repo.nii.ac.jp/records/4906

コロナ禍におけるリモート教育に関する覚書

田原広史

はじめに

令和二年（二〇二〇年）の年初に突然世界に襲いかかった新型コロナウィルスによる禍（ここでは「コロナ禍」と呼んでいる）は、大学教育においても甚大な影響を与えるものとなった。それから丸三年が経つが、この三年間において授業はどのように行われ、授業方法はどのように変化したのかについてここに記しておきたい。

幸いなことに、大阪樟蔭女子大学国語国文学会会報の巻頭言として、三年に渡り状況を記録しているので、まず、それを以下に転載し、その後に分析、今後の展望を示すことにする。

一、「コロナ禍の国文学科について」（令和二年十二月一日）

「みなさんお元気でしょうか」。この言葉は、現在のコロナ環境においては、もはや単なる挨拶ことばとしてのご機嫌伺いではなく、実質的で切実な質問の言葉となってしまいました。ここ数年冒頭のご挨拶で、辟易しつつも、猛暑やゲリラ豪雨、台風による被害など異常気象のことについて触れざるを得ない状況でしたが、とうとう流行病のことを書く羽目になろうとは…。

思えばこの半年間は、みなさんも含め日本中、いや世界中の人たちにとって、生まれてから一度も経験したことのない半年間であったに違いありません。世の中がひっくり返るような状況が展開され、将来、歴史の教科書で、新型コロナ前と新型コロナ後とに分けられるに違いない半年間であったと思われます。

さて、このような中で、わが国文学科ではどのような状況だったのかを、私の目線から記しておきたいと思います。

大学では、令和二年二月初めの定期試験までは問題ありませんでしたが、三月に入り緊急事態宣言が発令されてからは、途端に影響

が出始めました。三月十四日の卒業式については、講堂での式典は行わず、学科別に教室に集まって挨拶をするに止めることになりました。恒例となっている卒業式翌日の謝恩会も中止となり、昨年度の卒業生は中途半端な形で卒業せざるを得ないことになりました。

その後も、三月末の次年度の学科ガイダンスも行なえず、新学期の開始も幾度も延期が続き、授業開始はとうとう五月十一日となってしまいました。当然、四月一日の新入生の入学式も行なえず、当日は最低限の事務的な説明を一時間程度行なうのみでした。教員との対面も叶わず、結局、春学期新入生は一度も登校しないまま半年が過ぎるという結果になってしまったのです。

それでは、その間、教員はどのような状況だったのでしょうか。コロナ禍の状況下、今後の予定を検討することはおろか、現状を把握する暇もなく、四月十三日より大学自体がロックアウトとなりました。以来、五月の連休明けまで教職員も校内立入禁止となる中、授業形態、方法も定まらぬまま授業の準備に取り組まなければならない、というストレス多き時期を過ごすことになります。情報取得の頼みの綱はインターネットのみということになりました。

教員どうしの意思疎通がメールだけという、いきなり目隠しされたような状態ですので、国文学科では四月十四日より、学科長主導で、グーグルグループを使ってメーリングリストを作成し、お互いの情報や意見を交換し、議論を整理する場を作ることにしました。教員どうしのコミュニケーションは一週間ほどで順調になりました。

さらに、五月に入ると、大学がZoom（ズーム）のビジネスライセンスに加入し、教員全員がZoomを利用できるようになりましたので、早速、学科のミーティングをZoomで行なうこととし、より細かな打ち合わせが可能となりました。

授業が始まるまでの期間、学生、特に新入生への連絡には苦労しました。学校から各学生へ与えられている学生メールアドレスの設定ができておらず、新入生に設定を指示し、全員に一斉メールを出して、受けとった者から返信させるという方法で、二週間程度かけて何とか連絡がとれる状態になりました。

学生への連絡については、もう一つ、manaba（マナバ）というツールがあります。「クラウド型学習支援システム」と呼ばれるもので、以前から導入されていましたが、このコロナ環境におけるリモート授業では本来の威力を発揮することになりました。

授業が始まる前については、掲示板を通じて、学生にさまざまな連絡や情報提供をすることができました。また、スレッドという機能を使って、学生からの意見や提案を募ったりすることもでき、学生どうしで教えあったり、助け合ったりする状況が生まれたのは、通常の大学生活ではなかったことでした。

manabaでは、インターネット上で出席をとったり、課題を与えてレポートを提出させたり、簡単なテストもできるようになっています。さらに、双方向授業が可能であるZoomを加えることで、大学での対面授業に近い環境を作り出すことができることを学びました。

教室の授業と比べて、逆によい点もたくさんあります。たとえば、小テストやコメントシートを書かせる場合、どうしても紙に書かせ

ざるを得ませんが、リモート授業の場合は直接キーボードで入力してもらうことができ、後の整理やチェックが容易になります。

Zoomでは、教員のコンピュータ画面を学生と共有したり、書画カメラを使って手元での板書を提示したりできます。授業中にインターネット上のさまざまなコンテンツを提示したり、動画を再生したりすることも可能です。さらに、録画をしておいて、授業後にYouTubeにアップし、欠席者に見てもらうとか、聞き漏らしたところを再度見直してもらうこともできます。学びの幅が広がる可能性があるということです。

考えてみれば、国際的な企業や、アメリカのような面積の広い国では、以前から既に当たり前だったインターネット会議です。そのような国々から見れば、日常の延長だと言えるのかもしれません。ZoomやmanabaなどのシステムをZoomやmanabaなどのシステムを使ってみて、そのようなことを感じながら過ごした半年でした。

因みに私は、授業で教える内容を昨年とほとんど変えていません。教えるべき内容を変えるのではなく、必要なことが教えられるように、環境を変えるべきだと考えるからです。もちろん、そのためには機器の操作法を覚えたり、インターネット環境を整備したり、ソフトの組合せを工夫したりといった、別の努力が必要になりますが、むしろ、そちらにほとんどの時間と精力を費やしてきました。

半年の経験を経て、リモート授業は、学生だけでなく、教員にも誠実さを求めてくるということが分かってきました。

リモート授業においては、教師の遅刻はあり得ませんし、学生にとっても課題提出の締切は、教室と違ってかなりシビアなものとなります。また授業中、教師は教室や研究室では多少気を抜くことができても、リモート画面上では緊張の持続を強いられがちです。以上あげたようなことがよい学びにつながるのであれば、私にとって、このコロナ禍は転じて福となした、と言えるでしょう。

この禍、いつまで続くのか分からない状況ですが、そろそろ怨み言ばかり言うのはやめて、前向きに頑張って行きたいと思います。みなさま方も、医学上の予防には努めていただきつつ、生活上はこの状況に適応すべく、良い意味での開き直りを持っていただきたいと思います。

二、「（続）コロナ禍の国文学科について」（令和三年十二月一日）

卒業生のみなさん、在学生のみなさん、いかがお過ごしでしょうか。学科長の田原です。今年も昨年に続きコロナ禍下の国文学科の状況についてお知らせしたいと思います。

新型コロナウィルスによる世界的災厄が始まってすでに一年半が過ぎました。ワクチン接種もだいぶ進み、重症患者や亡くなる方の割合はかなり減りつつありますが、四月から六月にかけての第四波、そしてさらに七月から九月にかけての第五波においては、そのことを微塵も感じさせないほど、新規陽性者が爆発的に増えました。大学においても、当初の予定を変更し、授業開始二週目から原則リモー

ト授業に変更となり、それは六月末まで続くことになります。

本学においては、近畿大学の厚意により、七月上旬から八月上旬にかけて職域接種を受けることができました。この期間に本学から千名を超える学生・教職員がワクチンを受け、なんとか秋期からの授業に期待が持てるようになりました。

私は、昨年度、リモート授業をしていくにあたり、大学ではインターネット環境が十分でなく、春期は自宅で授業をしていました。しかし、自宅の一室では手狭になってきましたので、昨年の夏、思いきって自宅から駅に行く途中にある別のマンションを借りることにしました。現在続けているＮＰＯ活動の「事務所」と兼用で十分なスペースとリモート環境を手に入れることができ、昨年の秋期は思う存分リモート授業の研鑽を積むことができました。

以下では、私の秋期の授業を例に、今本学がどのような授業を行なっているのかについて、ご紹介したいともいます。

月曜日の午後は「進学講座」と称し、樟蔭高校の生徒二十名弱に対面で授業を行なっています。実は、この進学講座、春期についても高校の教室で行なっていました。大学はリモート授業だったのですが、同じ敷地にあるにも関わらず高校は通常授業をしていることに違和感はありました。

火曜日は、午前中に二年生のゼミを大学で行なっていますが、午後からは、「日本語講読」、「大阪ことば入門」という講義科目があり、それについては、前述の事務所で行なうので、昼休み中に移動しなければなりません。水曜日は、その逆で、一限目にリモート授業をしてから、午後は大学で三年生と四年生のゼミということになります。

木曜日は、午前中に一年生対象の対面授業である「国文学入門」、「読書へのいざない」があり、午後は引き続き大学で会議という日程になります。金曜日は研究日で「事務所」で仕事をします。リモートだから出勤日数が減るはずなのに、対面授業と、リモート授業が混在することで、必要以上に移動が生じるという、大いなる矛盾を感じています。何かが間違っているのではないか。リモート授業と対面授業を時間割上切り分けることができるとよいのですが、時間割が複雑でなかなかできそうにありません。

続いて、リモート授業の授業の状況についてです。今年の四月から大学として新たなツールを利用することになりました。Microsoft 365 というサブスクのアプリケーションソフト群です。その中にある Teams という共同作業用ソフトを使って、個人やグループ単位の連絡、情報や意見交換、資料共有と作成、はてはビデオ会議までしてしまおうというものです。

この Teams を、学生も含めた共通のプラットフォームとし、授業についてもそれを活用して行なおうという目論見です。半年使ってみましたが、あらゆる用途に使うには、まだまだ信頼が置けないようです。やはり、いろいろなツールを組み合わせないと効率的によい教育を行なうことは難しいのではないか、というのが今のところの感想です。

昨年紹介した双方向会議システム Zoom やクラウド型学習支援システム manaba に加え、この共同作業用ソフト Teams をうまく組み合わせるならば、よりよい教育へとつながるかも知れません。私の意見としては、Teams は教育よりも、教員同士の会議において威力を発揮していると考えています。授業への応用としては少人数でおこなうゼミ、特に教員と学生とでデータを共有したり、論文指導を行なったりする卒論演習が適していると思います。

ツールが増えることは、教える可能性が広がるという点では好ましいのですが、あくまでも教員が使いこなすことが前提となります。そこまで達するまではもう少し時間がかかるのではないでしょうか。

以下は、私の授業方法です。前回の会報でも紹介しましたが、原則として対面授業でおこなっていることを、できるだけそのままリモート授業でおこなっています。

manaba のいくつかの機能を使い、授業に関するさまざまな情報のやりとりを行ないます。授業前日までに、「スレッド」を使って Zoom の URL を案内し、初回は「アンケート」で授業開始時のリモート環境などを聞いておきます。「レポート」で毎週の授業の感想や質問を記入するための場所を作ります。「コンテンツ」にはその授業で使うプリントを入れておきます。

当日は共有画面で、manaba を写しながら、respon という機能を使って、学生に出席を入力してもらいます。基本はＯＨＣ（直接投影機）を使って、ノートをホワイトボードのように使い、記入しつつ解説を行ないながら、授業を進めます。場合によっては、エクセルやパワーポイントなどの画面、参考となるホームページを共有画面で写して説明することも行ないます。動画等を流すこともできます。

学生の顔出しについては、ゼミなどで直接やりとりをする場合を除き、カメラをオンにすることについては強制していません。質問や意見については、授業中には出にくそうなので、授業が終わってから、提出するレポート（質問票的なもの）に書いてもらい、次週の冒頭で答えたり、紹介したりするようにしています。

授業は決められた曜日時間にリアルタイムで行ないますが、前後の時間割の都合などで受けられなかった学生のために、授業をすべて録画し、授業終了後すみやかに YouTube にアップしています。ただし、期間は次の週の授業が始まるまでの間です。YouTube を視聴する学生もその中でおこなっている指示にしたがって、出席を入力できるようにしてあります。また、リアルタイムで受けた学生と、YouTube で受けた学生とで点数に差をつけたりはしていません。

大学ではリモート授業をさらに、同時双方向授業と、オンデマンド授業とに区分しているようなのですが、私の方法では区別をせず、同じ授業について、受け方が違うという程度の違いしかありません。

次なる取り組みにとしては、対面授業との区別をなくすことです。すなわち対面授業とリモート授業の混在、言うなれば「ハイブリッド授業」ということになりますが、これには多少の設備、機器面で

の投資が必要です。教室で行なっている授業に外から参加する、あるいは後からYouTubeで視聴するということになるので、教室を広く写すカメラが必要かも知れません。場合によっては教室の音声も拾えるマイクが必要でしょう。教師が主として話す大人数の講義ではなくてもいけそうですが、やりとりが頻繁に起こるゼミなどでは必須条件となりそうです。

実は、現在、昨年度までキャラクター文芸コースの演習室だった部屋で、ゼミにおけるハイブリッド授業を始めかけています。演習室における密回避の問題は予想以上に深刻です。十五人がけの部屋で一つ飛ばしにすると、定員が七、八人になってしまい、とたんに対面授業ができなくなってしまうからです。

ゼミ学生のうち、半数だけ大学に来てもらい、残りは家から受けるというやり方ができれば、この問題が解決できます。特に、四年生の卒論ゼミにおいては、対面でじっくり指導をした次の週は、リモートで進み具合をチェックするというやり方が可能になります。

ここまで来ると、ニューノーマル時代における大学の学びにおいて、対面授業とリモート授業とを区別する必要はもはやないのではないか、要はそのときの環境と条件にあった方法を無理なく選択し、いずれを選んだとしても、ほぼ同様の勉強ができる、そのようなゴールを目指せばよいのだということです。

昨年の今ごろはぼんやりとしか見えなかった、大学の目指すべき授業の方向性ですが、自分の中では、かなり焦点が合ってきたのではないかと思っています。そして、それは授業の中味や本質が問われることにつながっていくのだと感じています。

三、「（続々）コロナ禍の国文学科について」（令和四年十二月一日）

一昨年、昨年とコロナ禍の国文学科の状況について報告しましたが、今回でおそらく最後になるのではないかと、期待しています。令和二年の年明けから始まったコロナ禍は、すでに二年半が経ちました。時間に直すと、まだそんなものなのか。もうゆうに四、五年頑張っているかような錯覚に陥りますね。時間の感覚というのは主観的なものなのだと感じます。

さて、一年目はハチャメチャなリモート授業で過ぎていき、二年目はリモート授業と対面授業の組み合わせで何とかしのぎましたが、三年目はどうでしょう。さらに来年度以降はどうなっていくのか、このあたりについて、自説を述べてみたいと思います。

二年半が過ぎた現在、秋期の授業が始まっていますが、国文学科の学生の時間割を見てみると、まだリモート授業の割合の方が多いようです。割合にして、対面授業四割リモート授業六割、あるいは、対面授業五割、リモート授業五割といったところでしょうか。ただし、書道コースについては例外で、専攻の授業に限れば、圧倒的に対面授業が多い状況と言えます。

大学の授業はあらかじめ春期、秋期の時間割と教室割り当てを年度初めに決めてありますので、途中で変更することができません。

したがって、来月からコロナがパタリと止んだからといって、すぐにすべて対面授業に戻しましょう、というわけにはいかず、その次の年度の時間割から反映させましょう、ということになります。

現在の教室の人数の制限については収容率を五〇％以下に抑えるというもので、たとえば定員一〇〇人の教室では五〇人までとなっており、それを超える見込みの場合は、リモート授業ということになります。この基準が緩和されないと、おそらく、講義科目の多くはリモートのままとならざるを得ないのではないでしょうか。

先生方の本音から言えば、早く対面授業に戻りたいという人が多いのではないかと思います。しかし、学生はどうなのだろうか、気になるところです。元々登校が苦手な学生にとっては、リモート授業はある意味ほっとするものでしょうし、残してほしいと思うでしょう。遠距離通学の学生と、大学のすぐ近くに住んでいる学生とでは、状況が違うかもしれません。

流れとしては、大学でおこなう対面授業に戻していくということでよいと思いますが、せっかくこの期間にリモート授業で培ったノウハウや、対面授業では実現しなかった教育上の効果については、今後も残していくべきだというのが私の意見です。

その辺りを具体的に紹介したいと思います。私が現在（令和四年度秋学期に）おこなっている授業は次の八科目です。

A「大阪ことば入門」　（Zoom）　一年生
B「日本語講読（現代語）」　（Zoom）　二年生
C「日本語文法概論」　（Zoom）　二年生
D「研究入門ゼミB」　（対面）　二年生
E「発展ゼミB」　（対面）　三年生
F「発展ゼミD」　（対面）　四年生
G「国文学入門」　（対面）　一年生
H「読書へのいざない」　（対面）　一年生

A・B・Cの三つは講義科目で同時双方向のリモート授業（Zoom）で行っています。また、事情で同時に受けられない学生のために、すべて録画しYouTubeで一週間、限定配信しています。

D・E・Fは、いわゆるゼミですが、原則として大学で対面授業によりおこなっています。このゼミの授業方式が、一番理想に近いものだと考えています。

対面で参加できない学生、例えば、休むほどではないが体調が悪く通学できない、あるいは就職活動が授業時間の近辺に入っていて、大学に来るのが間に合わない、といった学生については、これまでは休まざるを得なかったわけですが、Zoomで自宅や出先から参加してもらっています。ZoomやTeamsをうまく活用すると、自宅からパワーポイントなどを使って発表することも可能です。

また、休んだ学生がいる場合は、他の学生の発表などを随時録画して、次週までに見ておいてもらえますし、確実に授業への参加機会が広がったと思っています。

G・Hは一年生の授業で、Gはお試しゼミ、Hはオムニバス形式で一〇～一五名程度の授業ですが、ゼミ同様、対面を基本とし、状況に応じてZoom、録画を併用しています。この授業は木曜日の一・

二限ですが、最近は持病や体調面から午前中の欠席者が多く、この授業方法は有効だと考えています。

D～Hで採用している方式は、「ハイフレックス授業」という名前が付いていますが、この名称は、対面と同時双方向のハイブリッド形式に加えて、授業時間以外にも参加できるようにYouTubeでも公開するというフレキシビリティを備えているというところからきています。

おそらく、この授業方式が大学の目指すべき授業の最終形ではないかと思います。ハイフレックス授業ができれば、コロナ環境への対応はもちろんできますし、十五回の授業を必ず大学で対面実施しなければならないという呪縛からも解き放たれます。半数の受講者が対面、半数の受講者が同時双方向で参加したり、全員が同時双方向の回があっても構いませんし、ゲストスピーカーに別の場所からリモートで参加してもらったりといった、文字通りフレキシブルな授業が展開できるはずです。

このように説明してみると単純ですぐできそうですが、実際にここまで達するにはかなりの知識と訓練、設備や技術的な準備が必要でした。幸い、大学や家庭におけるWi-Fiなどのインターネット環境が整備されたこと、大学がmanaba、Zoom、Teamsなどのリモート用各種ツールを早めに導入したこと、そしてYouTubeなどのSNS配信サービスが急速な進歩をとげたことなどが、ハイフレックス授業実施の環境を支えています。

「コロナ禍」は、これら技術の普及に拍車をかけてくれました。大学の授業が大きく変わる可能性を与えてくれたと言えるでしょう。

しかし、あくまでの授業をするのは教師です。教師の教育に対する正しい理解、信念がなければ、これらの環境を定着させ、さらに発展させていくことはできないと思います。コロナ禍を含め、その時々に与えられた条件の中で、学生に、最適な学習環境を与えるにはどのようにすればよいか、無理せずに根気強く勉強をしてもらうためにはどうしたらよいかについて、学生の側に立って考える気持ちが、このような技術を生かしていくのだと考えます。

私の次年度の目標は、A～Cの講義科目についての改善です。現在、講義科目は同時双方向で行なっています。コロナの規制がある程度緩和されてくれば、大学で対面の講義をしながら、同時にZoomで中継し、希望する学生には同時双方向で参加してもらう。さらに後日視聴する学生のために、それを録画してYouTubeで配信できるようにします。

教室のスクリーンに映す映像と、配信先のパソコンに映す映像を一致させるための操作上の問題、実施する教室の設備上の問題など、技術的にはさらに一段難しい課題がありますが、これまで三年間積み上げてきた経験があれば、何とかうまく行くのではないかと思っています。

まとめ

以上、三部作を改めて見てみると、方向性がまとまらず迷いが見

られる一年目から、方向性を見いだし安定している二年目、そして、将来的な展望を示すことができた三年目と、我ながらよくがんばったなと思う。

この期間における授業改善にあたって、重要なポイントを考えてみる。それは、教わる側、すなわち学生の立場に立って考えることである。特に、今回のように授業手段がまったく変わってしまうという場合、これまでの慣習や原則が通用しない。教える側にとってもパニックに陥る事態であるが、教わる側の混乱の方が遙かに大きいだろう。授業（教員）ごとに、授業方法は言うに及ばず、課題の種類、提出方法、提出締切などがバラバラになってしまい、学生はそれに一つ一つ対応する必要があるのである。

私はゼミの際に、各学生が受講している一つ一つの授業について、どのような状況であるのかを聞き取りながら、受ける側の大変さを痛感し、授業方法、課題、提出方法、提出締切についてシンプルにわかりやすく設定すべきだと感じた。

その結果が上に述べてきた授業運営に反映されている。以下に具体的に述べる。

一、授業は時間割上の授業時間におこなうこと。そのためには同時双方向授業で行なうことが必要である。時間割が存在しないオンデマンド方式は、日々の学習のリズムが作りにくく、できるだけ避けたい方式だと考える。

二、課題の締切は、次回の授業までにすること、後ほどYouTubeで見る場合も締切は同様としている。これにより締切がいつなのかをメモや記憶に頼る必要はない。ただし、課題の内容について次週の授業で紹介し、コメントするためには、次週の授業の前の時間を使って行なう必要がある。特に一限目の授業については、早起きしなければならない。要するに課題の締切は教員の都合が優先するのではなく、学生の利便性が優先するということである。

三、受講の機会（選択肢）を増やす方式を目指すこと、すなわち、学生がその時々の状況に応じて受講しやすい方法への対応が望まれる。同時双方向の授業を録画したものをYouTubeで提供する、さらに、演習室で対面授業行ないつつ、同時に同時双方向で提供し、外部からの参加をうながすこと、欠席者にはそれを録画したものを提供し、後日視聴する機会を与えること、といった取り組みに現れている。

四、学期末にすべての授業録画（YouTube）をプレイリストにして提供し、復習する機会を提供すること。YouTubeの限定公開は、メリハリをつけるために通常一週間限定としているが、期末が近づけば振り返りのためプレイリスト形式にまとめ、再公開している。

次に、これまでに活用したリモートおよびICTツールについての評価、感想を述べておく。

Zoomについて。シンプルなリモート会議システムであり、通信

の安定性が抜群なので安心して使える。現在のライセンス取得は希望者に対して大学がおこない、年間の利用料金は研究費から支払っている。他のアプリケーションと相性がよく、画像や映像を共有することが可能である。また、書画カメラを共有することができるので、手書きのものをプレゼンするときには必須である。高性能のOHCと組み合わせることで、精密なものを提示できる。

manabaについて。対面授業では使っていなかったが、リモート授業が中心となり、本領を発揮している。授業のお知らせを行なう他に、簡単に資料をアップし学生に提供することができること、学生にアンケートを行なう、レポートを提出させ確実に回収する、respon というアプリと組み合わせることで、手軽に出席を記録することができる。以上のようなよい点があり、多人数が受講する講義科目においては無くてはならないシステムだと考えている。

Teamsについて。大学として大学教職員、学生全員にライセンス契約をしており、全員が共通に使えるシステムである。現在では、メール、ラインに変わる連絡手段として使われているが、まだ授業ではそれほど活用されていないようである。私は少人数の演習形式の授業において、お互いの連絡、各自のファイルの管理、グループワークなどで活用しており、manabaと並び今や必須のツールの一つである。同じファイルを複数人で同時に編集できるので作業が効率的に行える。例えば、授業中にパワポのプレゼン資料を分担して作成していくことができ、効率的に作業できる。また、データがクラウドにあるので、大学でも自宅でも同じファイルで作業ができるのも魅力である。

YouTubeについて。授業録画をアップし限定配信により学生に提供している。授業後にZoomから変換しアップするためには、九〇分のデータで二〜三〇分程度かかるが、容量やファイル数の制限なく無料でアップできるのが魅力である。プレイリストにまとめれば、一学期分の授業を一覧することができる。

コロナにより授業環境は一変したが、今から考えると大いに進歩したのではないかとさえ思う。日本は国が狭くてリモートの必要性が感じられなかったのかも知れないが、グローバルに見ればやっと国際基準に近づいたのかも知れない。

ただ、まだまだリモートツールに振り回されている面が大きく、リモート環境に合わせて授業内容を組み立てる、といった本末転倒な取り組みが多いような気がする。授業の本質を見失わず、より高度な授業内容を提供するためにリモート環境を活用する方向に近づきたいものだと思う。

【出典】

大阪樟蔭女子大学国語国文学会（二〇二〇年一二月）「会報六四」
大阪樟蔭女子大学国語国文学会（二〇二一年一二月）「会報六五」
大阪樟蔭女子大学国語国文学会（二〇二二年一二月）「会報六六」